

や ま が ら

若い時分に出会った森の美しさに心を奪われ、それが自身の原風景となって、森林研究者や実務家を志した人たちは多いと思う。たとえば、小学生の頃に遊んだ身近な雑木林の記憶、帰省時に祖父・祖母と歩いた実家の裏山の思い出、仲間たちとの山行中に見た山裾に広がる樹林帯の美しさ、植樹や間伐体験イベントに参加した時の人工林の眺め、学生時代の林学科実習で訪問した天然林の美しさなど。その時は印象に残らなくても、だいぶ時が経ってから、ふと思い出して、その森の美しさを再認識することもある。森林に関わる多くの人は、「私だけの美しい森」を心の底に大切に持ちながら、森の研究や実践を続けているのではない。

美しい森は、生き生きとして強靱なるがゆえに美しく、見る側を幸せな気持ちにしてくれる。そして、森林の研究や実践に関わる者は、自身の原風景のような美しい森づくりを目指していきたいと思う。そのためには、パーソナルな美意識を軸としつつ、多くの人が共感できるような普遍性のある森林美を追求していく必要がある。では、普遍性のある森林美とは一体どういうものなのだろうか？

森林美の研究は、プロイセン（現ポーランド）出身で森林官・林業経営者だったH・フォン・ザーリッシュ（Heinrich von Salisch）が、『森林美学』（1885年）（直訳は「人工林の審美」）で体系的に扱ったのが端緒と言えるだろう。ザーリッシュは、針葉樹施業林（人工林等）を対象に、樹木の美的価値、伐採・植栽時

期、地形・風景の美、林道開設の要件、森内施設の問題点などを考究した。

森林美学の日本への紹介は、東京大学教授の川瀬善太郎や本多静六らが担ったほか、北海道大学（札幌農学校）教授の新島善直らはザーリッシュの影響を受けつつも、天然林の美まで扱った独自の著書『森林美学』（1918年）を書いた。北海道大学ではその後、今田敬一、小関隆祺、小池孝良らによって森林美学の講義が100年以上にわたって講じられてきた。小池孝良らは、ザーリッシュ本の英訳版を訳した『森林美学』（2018年）、『森林美学への旅：ザー

リッシュの森をもとめて』を出版している。

これらの本を読み進めていけば、先に述べた

森林の美について

普遍的な森林美にたどり着けると思っていたが、浅学非才の筆者はまだ道半ば。たとえばザーリッシュ『森林美学』（2018年）は、「森林美とは何か」という根本課題が読み取りにくいので、個別の記載で参考になる点が多いものの、森林美学の全体像（体系）を筆者は掴めないうままでいる。関連文献を読み込んでいけばもう少し理解が進んでいくかもしれないので、あくまで現段階の暫定的な見解だが。森林美学に精通した方がいらっしゃれば、ぜひ教を乞いたいと思う。ザーリッシュの「最も合理的な施業が行われた森林は、最高に美しい」という境地はいずこ。

（鈴木 春彦）